

### #3. Youは何しにJapanへ

ジェイナ・トキエ・タナカ

セミリンガリズムという言葉があるが、これは1920年代に米国の言語学者レナード・ブルームフィールドによって造られた用語で、米国先住民の言語の話者たちを調査した際に出会った現象を記述するためのものだった。成長の過程で2つの言語を使う環境に身を置いてはいたが、そのどちらの言語にも熟達することができなかった人たちがいたらしいのである。つまり、彼らはモノリンガル（1つの言語のみを習得している人）でも、完全なバイリンガル（2つの言語を使える人）でもなく、どちらの言語も十分に使うことができなかつたのである。最近、この用語が言語学者の間でいくぶんか不人気なのだが、理由は政治的（社会的）に公正ではないということらしい。いやむしろ、仮に話す言葉に複数の言語が入り込んでいれば、見方によってはほとんどの人がバイリンガルかマルチリンガル（複数の言語を自由に話せる人）だと指摘されてきている。例えば、中国やインドには様々な通用語（ある地域や階層で話される言語；方言）と言語があるが、子供たちは学校で標準的な通用語を習わなければならない。こうしたことはある程度世界のいたるところで生じているので、セミリンガリズムという用語を使う必要はないと考える人たちもいる。しかしながら、私は、この言葉が私の知る何人かの人たちを理解するのに役立っていると感じる。彼らは教室とは異なる、正規ではない環境で2つの言語を習い覚えた人たちなのだ。たぶん、またその用語を使えば、私が初めて日本に来た時に遭遇し、そして最近ますます耳にするようになったある現象をうまく説明することができる。

来日後、私はアメリカ軍人と日本人の母親の間に生まれた子供たちに出会った。その子供たちの話す日本語は殊にそのきれいな発音ゆえに完璧のように思えたが、アメリカ軍基地で運営されていた学校に通っていたせいで日本語の読み書きができなかつた。つまり、学校という環境では話すことに加えて読み書きすることを求められるので、その子供たちの使う英語は日本語よりも出来がよかったということである。私を悩ませたものは、彼らは自分の話している相手が英語も日本語も理解できて使えると知ると、「Youは本当にlying（うそつき）。Me（私／僕）はもうあなたが信じられない」などと英語と日本語のちゃんぽんで話してくることだった。要するに、今回のエッセイの題名と同じように話していたということである。この題名はテレビ東京の番組名を茶化したつもりだが、初めてこんな調子の会話を耳にしたときは、滑稽というよりは衝撃的だった。

長い間こうしたおかしな話ぶりを聞くことはなかつた。5年ほど前、私は教鞭をとっている学校から最寄の駅までの道のりを歩くことにした。キャンパスを歩いて大通りを歩いて行くと、教室から出て皆一斉に家路を急ぐのでしばしば学生の集団に挟まれることがあ

る。私には学生たちの会話が聞こえるのだが、最近、このエッセイの題名にあるような文が会話のそこそこに聞こえることが増えてきている。この学生たちは日本語と英語をどちらも単独では使わないで、たいてい同じ 1 つのセンテンスの中でどちらの言葉も使う。私はときどき彼らがどんな様子をしているのかと見回すことがあるが、たいてい外見は日本人に見えるので、彼らはアメリカで暮らしていたか、英語で授業を行う日本の学校で学んだのだろうと推察している。日本語と英語という 2 つの言語を使う環境に続けてきたことで、結局はどちらの言語にも自信が持てないことを何らかの形で私に伝えた人たちを知っているがゆえに、日本語と英語のちゃんぽんの話し方に私はひどく悩まされるのだ。学校でエレベーターを待ちながら、あるいは通学専用バスに座りながら、こうした会話を最近ではしじゅう耳にする。

私が耳にしていることが永遠に治らない欠陥でなければよいと思う。こうした学生が「セミリンガル」でないことを願っている。私は、「母語」と呼ぶことのできる言語を 1 つ持つべきだと本当に思っている。そうすればどのような状況に直面しても自信をもってその言葉を使うことができるからだ。